

絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『ともだちや』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
上田健翔・植田舞香・加藤鈴菜・
高口実佳・古賀玲菜・高岡莉子・
友添亜由実・溝内咲衣華・米田萌生

題材とした絵本：『ともだちや』

文：内田 麟太郎 絵：降矢 なな 出版：偕成社（第65刷）

タイトル：「ともだちや」

実践準備の担当：プロデューサー（植田舞香，高岡莉子）、衣装（高口実佳，米田萌生）、小道具（溝内咲衣華，古賀玲菜）、音楽（加藤鈴菜）、記録・報告書（上田健翔，友添亜由実）

実践時の担当：キツネ（高口実佳，高岡莉子）、オオカミ（米田萌生）、ブタ（溝内咲衣華）、熊（上田健翔）、ナレーション（古賀玲菜，友添亜由実）、音・演奏（加藤鈴菜）、カメラ・音響（植田舞香）

1. 題材「ともだちや」選定の理由

私たちが「ともだちや」の絵本を選んだ理由は、「ともだち」とは子どもたちにとって一体どのような存在なのかを幼教こども劇場を通して考えて欲しかったので選んだ。

絵本に出てくるキツネとクマはお金のやり取りで一緒にご飯を食べてともだちになるが次のキツネとオオカミの場面では、キツネがクマからお金でともだちになったようにオオカミにお金を請求するが、オオカミはキツネに「本当のともだちからお金を取るのか。それは本当のともだちか」と叱る。

このように、「本当のともだち」はお金で買ったり売ったりすることができるのか、果たしてそれは「本当のともだち」であるのかを子どもたちと考えたかった。

また、5歳児ということで3月に母園を卒園し、4月には小学校に入学する。小学校に入学をしてどのように周りの子どもたちと関わっていったら「ともだち」になれるのかを動物たちの遊びや歌で子どもたちに伝えることができればいいなと考えた。



（執筆者：米田萌生）

2.絵本の世界から遊びへの展開

絵本の中では提灯やトランプ、食べ物等が主に出てくるため、それらを元に展開できる遊びを考えた時に、子ども達同士が協力して一つの提灯を作り上げ、友達と喜び、達成感を感じたり、食事を通して一緒に食べる楽しさを子ども達に伝えたいと考えた。また子ども達にも一緒に友達について考えたいという思いから、子ども達に毎日の園生活で友達とどのような遊びをしているのかを問いかけたり、学生と画面を通して遊ぶ事で一緒に遊ぶ楽しさを伝えたいと考えた。

遊びを通して私達は友達や大切な物はお金では買えない事や友達の存在を大事にしてほしいこと、そして色々な遊びを通して友達になるきっかけを作ってほしいという事を一番子ども達に伝えたい為、どのような展開や声掛けが一番伝わるのか試行錯誤しながら取り組んだ。

プレ本番での子ども達は、普段どのような遊びをしているのかの問いかけに、おままごとやカードゲーム等好きな遊びを伝える姿が見られた。私達は子ども達の声を受け止め、その場でできるボール遊びやおままごとをしながら、遊びを通して友達にお金は必要ないという事を伝えた。しかし子ども達は話を聞いて学生の遊ぶ姿を見るだけで本当に伝わるのか疑問に感じたため、もっと子ども達自身が一緒に楽しく遊びながら自分なりに理解できるように改善を図った。

本番では食事をする場面で子ども達とお弁当箱の手遊びをし一緒にお弁当を作った。作った後すぐに一人の子どもが「僕のお弁当あげる」と画面越しにお弁当を渡す姿が見られた。それを見た他の子ども達も一斉にお弁当を渡し始めた。そこから学生と子ども達がそれぞれ作ったお弁当を交換する事になり一緒に仲良くお弁当を食べた。お金ではなく友達をつくる為にはどのようにすればよいかの問いかけに子ども達は「遊びに入れて」と友達に言う学生に伝えた。私達はその言葉を使い、おままごとやフラフープ、風船遊びを全力で楽しみ、子ども達にも一緒に遊ぼうと声掛けをした。子ども達はフラフープがそこにあるかのように腰を回して遊んだり、風船を想像しながらカメラに投げてキャッチボールのように一緒に遊ぶ楽しむ事ができた。

他にも本番では歌を取り入れ、子ども達と一緒に「もりのくまさん」「ともだちになるために」を歌った。「もりのくまさん」では歌に合わせて振り付けをし動きを取り入れた事で子ども達も一緒に走り回ったり自分なりに踊って楽しむ姿を見る事ができた。

(執筆者：上田健翔)

3.実践に際して大切にしたこと

絵本を元にして劇を通す中でどんなことを子どもに伝えたいかなどを考えながら実践した。その中でも私たちは、歌を通して子ども達に伝えたいという思いがいちばん強かった。

プレ本番とは全く違う子どもの反応で最初は戸惑いもあったが、その場の子どもの反応に対して臨機応変に対応出来ていたのではないかと思う。子どもたちが反応してくれるように質問を考えたりすることができた。

大切にしたことは子供たちとの対話をしっかり行いながら、私たちが伝えたいことを伝えることだった。友達はお金で買えるものじゃない、どうやったら友達になれるのか伝える事ができ、そのことに対して子どもたちがどのような反応をしているのか汲み取ることも大切にしたことだと思う。

自分たちが思っている以上に子どもたちは素直で色々なことを教えてくれていて、その答えに対し、どうしたら子どもたちに分かりやすく伝わるか、その場の雰囲気にあっていることは何かなどを瞬時に考えて対応することが出来たかなと思う。マイクを持って話すことが出来ずできるだけ大きい声で伝わるように意識したことも大切にしたいと思う。

(執筆者：加藤鈴菜)

4.内容について

(1) 全体の構成

導入：子ども達に「お昼ご飯は何食べた？」、「皆何歳？」と最初に尋ねて少しずつコミュニケーションを取る。

カメラからひょこっときつねさんの耳を出して子ども達の反応を見ながら、何の動物か答えて貰う。

何の物語をするか子ども達に話してから劇を始める。

場面①：小ぎつねの前奏を弾いてお話が始まる。

ぶたさんが椅子に座って1人でご飯を食べてると、ともだちやさん(きつね1)を見つけて、ぶたさんが声を掛ける。

ともだちやさんはタダでは友達になってくれないと言う事で、ぶたさんがともだちやさんに100円を払って、おにぎりを食べて仲良くなる。

しかし、2匹はまだお腹いっぱいになってないと言う事で、保育園の友達と一緒に弁当を作ろうと言って、「おべんとうのうた」を歌って子ども達と手遊びをしてお腹を満たした。そんな2匹は満足そうに肩を組んで帰って行った。

場面②：ともだちやさん（きつね2）が出てきて、お金で友達になる人を探している。

そこに、オオカミさんがやって来る。

友達になりたいと思ったオオカミさんだったがお金では友達にはならないと言う事で、遊んで仲良くなろうと伝える。

それに納得したともだちやさん（きつね2）だったが、どんな遊びをしたらいいか分からなかったなので、どんな遊びをしたらいいか保育園の友達に尋ねる。色々出してくれた。

聞いた事をもとに、風船遊びやフラフープを使って、体を動かす事で楽しそうに2匹は遊んだ。

2匹は楽しくワクワクした気持ちで帰って行った。

場面③：ともだちやさん（きつね1）が出てきて、お金で友達になる人を探している。

そこに、熊さんがやって来る。

友達になりたいと思った熊さんだったがお金では友達にはならないと言う事で、歌を歌って仲良くなる事を決める。

「森のくまさん」の歌を2匹じゃ寂しいから周りにいる仲間達も呼んで一緒に歌を歌って2匹は仲良くなった。保育園の友達も一緒に体を揺らしながら歌った。

場面④：最後に皆ひとつになっても仲良くなりたいと言う事で、動物達全匹を集めて、「ともだちになるために」を保育園の友達と一緒に腕を組んで歌った。

保育園の友達に動物達が仲良くなった事を伝えて、物語は終わった。

皆で仲良くする事を保育園の友達に伝えて、全部終了した。

(執筆者：古賀玲菜)

(2) 子どもたちとの対話について

子どもたちと対話するとき、子どもたちが考え、答えやすいような問いかけをすることを意識した。問いかける前には「○○保育園のみんな」や、問いかけの最後に「教えて」など、子どもたちが自分の考えや気持ちを伝えやすいように言葉を少し加えて問いかけた。

そして、子どもたちは「何のおにぎりが好き」「どうしたら友達になれるかな」などの問いかけに対して自分の考えや気持ちを一生懸命学生に伝えようとする姿が見られた。

しかし、学生は子どもたちの反応に対して応答できていなかった。保育園に向かってくれていた学校の先生やその園の保育者に助けられ、好きなおにぎりの具材を聞いて子どもたちに手を挙げさせていたり、「友達になるには「入れて」といって下さい」と学生が拾えなかった子どもたちの気持ちを先生が学生に伝えた。先生や保育者に助けられているときは学生は何も出来ず、ただ子どもたちの様子を見ているだけだった。

台詞を考え、意識した問いかけはできていても、子どもたちが答えた気持ちを学生が拾えず、それに対しての言葉を返すことができていなかったため、頷くなどの動作や言葉掛けをもっと大切にしないといけなかったなと思った。

(執筆者：高岡莉子)

(3) 表現の工夫

一人一人が動物になりきるために頭に動物の耳を付けたカチューシャをつけて本物に見えるようにした。また、絵本の話では森の中だから背景に大きな画用紙を貼り合わせてメンバーの手形で葉っぱをイメージし木を作った。

最初は周りに何もなくて寂しかったが、みんなで工夫して考えて旗などで表現することができた。カメラは細かな動作がよく見えるように近づけたり離したりと工夫した。表現する際は小物を使ったり、現具を使ったりして実際に遊ぶことで子どもたちも楽しんでくれた。

また、誰がどの動物かが分かるようにその動物になりきるよう動きを入れて表現することを大切にされた。カメラを通して実際に子どもたちと遊んでいるように風船を投げるような動作をしてお互い楽しんだ部分も工夫した。食べるシーンでは、椅子を使うことで本当にご飯を食べているような感じになりより良い表現ができた。

(執筆者：植田舞香)

(5) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

子ども劇場をやってみて子ども達の反応は、楽しそうにしている私たちが質問した事に対して素直に答える姿が見られた。反応がない時や、私たちの伝えたい事が上手く伝わらなかった時は、周りの保育者の方々など子どもたちに伝えて下さったり、子どもたちも先生に聞いたりして、子どもたちと上手く会話が出来てさまざまな子どもの表情を見ることが出来た。

「まだお腹が空いてるなー」、「どうやったら友達になれるかな？」など沢山の意見を言ってもらい想像していた意見より面白く、私たちも楽しく子ども劇場を行うことが出来た。歌を2つ歌った時も、私たちと同じように動いて歌っていた。画面越しの劇だったので少しのズレなどもありましたが、歩いたりジャンプしたり体を動かして楽しむ姿を見ることが出来た。

友達になる時に風船を投げる場面があった。実際に子どもたちに風船がある訳ではないけど、先生方の協力もあり風船を私たちと子どもたちで投げあっているような形が出来、子どもたちの笑顔をたくさん見ることが出来た。きつねさんの足の怪我を心配したり、映ったらいけないものが映ったら時は「何あれー？」など伝えてくれて子どもたちが集中した時は見る力がすごく、全て思った事を伝えてくれる子どもの良い特徴を感じた。

劇の中で友達になった時も子どもたち自身が喜んでくれていて、私たちもとても嬉しく、子どもたちの予想してなかった発想や発言に驚いたり楽しく劇を行えることが出来た。

(執筆者：友添亜由実)

(6) 計画の難しさや、過程での改善と工夫

グループのみんなで、子どもたちに楽しんで貰えるにはどのようにしたら良いのか、登場人物を分かりやすくするにはどうしたら良いのか、などを練習を通して試行錯誤しながら取り組んだ。

その中で、キツネの持ち物である提灯を子どもたちと一緒に作りたいという案があったり、クマの持ち物であるはちみつをスライムで作ってみたいという案があったり、登場人物に合った歌を子どもたちと一緒に歌いたいという案があったりと、沢山のアイデアを出しながら、劇の時間や予算などの面からできるかできないかなどの判断をし、様々な意見がある中で、改善と工夫を繰り返しながら計画を立てて行った。また、キツネは黄色系の洋服、クマは茶色系の洋服、オオカミはグレー系の洋服、豚は白系の洋服を着たり、動物の耳のカチューシャを作ったりと、子どもたちに一目でなんの動物が分かってもらえるような工夫もした。



そして、グループのみんなの複数の意見を、一つにまとめる難しさを学び、グループのみんな協力する事の大切さを改めて実感した。

(執筆者：高口実佳)

(7) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

幼教こども劇場をしてみても子ども達の反応は質問に対して元気よく返答をしていた。子どもたちはしっかり座って話を聞いていた。

劇が始まって子どもたちが自分の意見を沢山言っていたので劇をスムーズにし子どもたちに手を挙げてもらうなどしてもらおうと良かったと思った。一緒にお弁当箱の歌を歌った時にみんな歌を知っていたからみんなで楽しくお弁当箱の歌を歌うことが出来た。

子どもたちは質問にも色々な意見を出してくれて協力してくれていた。何か言う時も元気よく言っていた。子どもたちに対してもう少し身振り手振りや反応をすると良かったと思った。

あと声が思った以上に小さかったので大きい声で話すと良かったと思った。

風船のキャッチボールでは子どもたちはとても盛り上がっていて画面越しだけどしっかりとキャッチボールができていたと思う。子どもたちは立ってフラフープの真似をしたりしてとても楽しそうだった。

なかばから子どもたちとしっかりと会話ができている。森のくまさんを歌う時もみんなしっかり歌いながら体を沢山動かしていた。友達になるために歌う時も子供たちは歌は知らなかったけど体を一緒に揺らしたりしてくれていた。歌声をもっと大きく歌うと良かったと思った。

(執筆者：溝内咲衣華)

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【上田 健翔】

今回の幼教子ども劇場を通して全体的に子どもに対しての言葉掛けがもっと丁寧に具体的にすべきだと感じた。私達は5歳児の子ども達に友達について遊びや歌を通して伝えられたが、実際には淡々と話を進めてしまったと感じる。

学生が台詞を言い合う場面ではただ台詞を言うだけではなく、動作を大きくはっきりと伝え、子ども達の反応を見ながら進める事が大切だと感じた。その上で「お金では友達にならないよ」や「どうすれば友達になれる」等の大事な台詞は繰り返し丁寧に伝え、子ども達が考え理解しやすいようにもっと工夫する必要があったと感じた。最終的に子ども達に助けられた部分も多く、子ども達が意欲的に学生と対話してくれたり一緒に全力で遊んでくれた事で成り立つ事ができたと感じる。

今後、子ども達と関わる際には自分が何を一番伝えたいのか、どのようにすれば伝わりやすいのかをよく考え、自分自身も楽しむ事を忘れず励んでいきたい。

【植田 舞香】

今回の幼教子ども劇場を通して、オンラインだからこその子どもとの関わり方が大変だと感じた。オンラインだと声が通らなかつたり子どもの返答が時差があり分らなかつたりすることが多くあった。

自分は、1番最初に子どもたちに話しかけてコミュニケーションを取ったが子どもの声が途切れたり、なんて言っているかわらなかつたりした時があり、その時に身振りなどをして表現すると良かったと思った。私の役割はカメラ、マイク担当だったけど、周りの声を聞きながら、一人一人の声の大きさを確認しながらマイク調整するのが大変だった。カメラワークは、友だちと協力しながらすることができた。動作が分かるように近づけたり離したりすることの大変さがわかった。

絵本を題材に実際に劇をするのは準備から大変だったけど、子どもが楽しんでくれていてよかった。幼教劇場を通してたくさんのことを学ぶことができた。

今後、現場に出た際、子どもとの関わり方など活かしていきたいと思った。

【加藤 鈴菜】

今回のこども劇場を通して、子どもたちは色々な考えを持っているなと感じた。私たちが考えていたこととは違うことを発言したり教えてくれたりして、私たちが気付けないことに沢山気付いていたなと思った。

私は役を演じるのではなく、ピアノを弾いていて、ピアノを弾いている時の子どもの様子はわからなかつたけど、私たちがしていることと同じ行動をしていたなと後からのビデオを見て感じた。

子どもは素直で思ったことをすぐ口にする事が出来るなと思った。考えていたことと違う反応をしてくれて多少の戸惑いもあったけど、園の先生方にすごく助けられていたなと感じた。オンラインでの難しさも身をもって感じた。

また、私たちが実施した園の子どもたちは比較的人数が多くまとめることも簡単じゃなくて、大きい声を出しても伝わらないことが難しかったなと感じた。子どもたちは、園の1番上ということを理解していて、始まる前の5歳児なりの配慮が出来ていて、小学生になる準備もできているなと感じた。

絵本の設定が難しく遊びに発展させることが大変だとも感じた。子どもたちの反応を素直に受け取り実践することが出来たのは、これからの保育に対しても生かせる一つの方法だと思う。

【高口 実佳】

今回の幼教こども劇場を通して、構えと、臨機応変に対応する事が大切だと感じた。

オンラインと言うこともあり、子どもたちの反応の時差や電波による聞こえづらさなどもあったが、子どもたちが言ってくれた事に対してうまく拾えなかったり、思った返答と違い戸惑ったりした部分もあった。

だから、子どもたちがいつでも、どんなことでも言ってくれた時に、迷わず返答してあげられるような構えが必要だと思った。

また、問いかけの時には子どもたちの返答をうまく拾い、臨機応変に対応出来た部分もあった。

そして、何よりも子どもたちの発想の豊かさに魅了され、純粹に、元気に楽しんでくれる子どもたちにほっこりした。

ただ、劇をするだけではなく、色んな難しさや、大切さに気づき、多くのことを子どもたちから学ぶことができ、とても需要のある幼教こども劇場だったと思う。

【古賀 玲菜】

今回の幼教こども劇場を通して感じた事は、直接じゃないからこそいかにどんな風にして飽きないで楽しんで貰えるか、物語を進めて行く中で子ども達とどうコミュニケーションを取って行っていくかがもの凄く大切だと感じた。

また、オンラインだからこそ大きく体を動かして表現したり、一緒にどんな事をしたら楽しめるかなど考える事がとても難しかった。

「どうしたら友達になれるか」という場面では、私達だけじゃ考えきれなかった遊びのアイデアを子ども達が出してくれたり、私達がしている事を一緒に真似してくれたり子ども達に助けてもらった部分が沢山あったと感じた。

物語自体は淡々と進んでいってしまったが、周りにいた保育者達が子ども達に沢山声をかけて下さり、率先して動いて下さった事から、子ども達が楽しんでくれていた。

周りの方達に助けてもらいながら物語を成功させる事が出来て良かった。

自分達が心の底から楽しむこと、そうする事で相手にも伝わり楽しんでくれると言う事を学んだ。

子ども達が居てくれたからこそやり遂げる事が出来、子ども達から学ぶ事も沢山あると言う事を改めて感じる事が出来た。

今後、保育の現場に出て、子ども達の前で劇や何かをする時など、今回行った事を思い出して、子ども達が1番に楽しんでくれるように様々な事に注意しながら、自分自身もしっかり楽しんで伝えたい事をしっかり伝えられるように行っていきたいと感じた。

【高岡 莉子】

今回の幼教こども劇場を通して、子どもたちと一緒に全力で楽しむことが大事だなと改めて感じた。どうやったら友達になれるのかについて考えるとき、子どもたちにどのような遊びをするのか問いかけ、たくさんの遊びを教えてくれた。

その中から、フラフープと風船でのボール遊びを子どもたちと一緒に行った。子どもたちは画面越しで一緒にフラフープをしている動きをしたり、ボールを学生に投げる動きをしたりと体をたくさん動かして一緒に遊びを楽しむことが出来た。

そして、歌を歌うときにも学生と一緒に体を揺らしてくれたり、学生が手を繋いで歌っていると、みんなで手を繋いでくれたりした。それには、周りにいた保育者の方も子どもたちに負けないくらい全力で体を動かしてくれていたり、子どもたちに「手を繋いで」などの声掛けをして下さったおかげで、雰囲気良く、子どもたちも一緒に楽しそうに体を動かしてくれていたんだと思う。

終わってみて、反省はいっぱいあるけれど子どもたちや保育者に助けられながら自分達も全力で楽しむことで子どもたちと一緒に楽しんでくれることを改めて学ぶ事ができた。

【友添 亜由実】

子ども劇場を通して、オンラインだったため聞き取りやすい声や、動きを大きくするなど子どもたちにわかりやすくする事がとても難しかったです。話を進めていく時にハブニングなど起こらないように事前の準備がとても大変でした。

友達になる時の遊びの中で、たくさんのレパトリーを準備して子どもたちがなんて言うのかどんなことしたら楽しみながら遊んでくれるかなど考えました。子どもたちは画面越しだったけどフラフープをしたり風船を投げたりなど楽しそうにやっていました。

私たちが想像していなかった、友達になるには「いれて」と伝えるといいよと教えてくれました。先生の援助のおかげで物語を進めることが出来たのでよかったです。私たちが全力で楽しんだこと子どもたちもすごく楽しそうで、お迎えに来た保護者の方も一緒に踊って楽しそうにされていました。

劇を通して考える事の難しさや、相手に伝える難しさがあるなと思いました。これから関わっていく子どもへの対応を学ぶことができました。

【溝内 咲衣華】

今回の幼教を通して子ども達との関わりでオンラインで接することの難しさやいかに分かりやすく伝えるかが大事だと感じた。

オンラインだと声が途切れたり伝わっているか分からなかったりしたから確認したり身振り手振りをするといいいのかなと思った。子どもたちは楽しんでくれていたのが伝わったのでよかったです。一緒に考えたり歌ったりして子どもたちは知らない歌でも体を揺らしたりしてくれていたのが自分も楽しめました。

絵本を元に演技したりするのは少し難しかったけれどみんななりきってやれていたのが成功したと個人的には思いました。

これから子どもたちと関わっていくうえでどうしたら分かりやすく伝わるのかを考えて発言や行動をしようと思いました。子どもたちや先生方の援助があって成功や楽しんで出来たと思います。1人ではなくみんなでしたら楽しいし仲を深めることが出来ることを学びました。

これからも子どもたちと関わる時はどうしたら楽しめるかなど考えて行動しようと思いました。

【米田 萌生】

今回の幼教こども劇場を通して、子どもたちの思いや考えを聞き取り即座に対応する必要性や重要性を学んだ。

実際に子どもたちの前に立って子どもたちに問いかけながら話を進めていくので当日までどのような返答が来るのか分からない。

そのため、この問いかけに対して子どもたちはどういう反応を返してきてくれるのかを数パターン用意しておく必要がありその辺を子どもたちの思考になって考えていくのがとても難しかった。子どもたちの前では、実際に風船とフラフープをして遊んだ。子どもたちの手元には風船やフラフープは無かったのにも関わらず私たちが風船を子どもたちに向かって投げると風船を投げて返してくれたりフラフープを回していると子どもたちもフラフープを回す動きをして楽しんでくれていた。子どもたちが身体全身を使って楽しんでくれていた様子を見ておもちゃなどの道具が無くても子どもたちは全力で楽しんでくれていて嬉しかった。

学生や子どもたちと協力して1つの作品を作る楽しさや面白さを感じることができた。

幼教こども劇場で今回学んだことを活かしてこれからの学びに繋げていきたいと思った。